



いおの 五百野皇女塚

国道163号を片田久保町から伊賀方面に向かうと、JA津安芸美里支店を過ぎたところで、右手に大きな石碑(写真)が目に入ります。

この石碑には、「景行天皇皇女久須姫命之古墳」と記されています。鎌倉時代に書かれたと考えられている「倭姫命世記」などによると、久須姫は景行天皇の第7皇女と伝えられ、「日本書紀」などの歴史書に登場する五百野皇女と同一の人物とされています。



古代から中世にかけて、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、「斎王」と呼ばれる未婚の皇女を派遣する制度がありました。実在する斎王としては、壬申の乱に勝利した天武天皇により、その感謝を伝えるために天武3(674)年に伊勢に遣わされた大来皇女が最初とされます。それ以前にも、倭姫命などの伝説上の斎王の名前が伝えられており、五百野皇女もその中の1人です。

「日本書紀」によると、五百野皇女は、景行天皇が即位して20年後、伊勢に遣わされたと記されています。五百野皇女がその任を解かれた時期は記されていませんが、「美里村史」に収められている伝説によると、都に帰る途中に美里町五百野で病にかかり、亡くなったとされています。五百野皇女はこの地に葬られたともいわれ、五百野の地名は皇女の名前に由来するという説もあります。

もともとの石碑は昭和15年、現在の場所よりも東に広がっていた田園地帯にあった塚の上に建てられました。その後、水田の区画整備が実施され、昭和59年に現在の場所に移されました。

また、石碑の北にある高宮神社には、祭神の一つとして五百野皇女が祭られていて、地元では「姫宮さん」と呼ばれ親しまれています。

なお、県内には他にも五百野皇女の伝説が残されています。志摩市の最西端にあたる浜島町南張には、大きな楠が特徴の楠御前八柱神社があります。この神社には五百野皇女(久須姫)が祭られており、社伝によると五百野皇女が斎王の時に南張を訪れ、打ち寄せる波の美しさに感動して、この地を「ナミハリ」と呼んだことから、後に「南張」という地名になったとされています。また、五百野皇女は南張の地に館を建て、斎王の退任後はそこに住むようになり、その地で没したという話も残されています。

古代の斎王については記録も少なく、斎王が都から伊勢へ向かい、また役目を終えて都に帰った道は、今も不明な点が多く残ります。斎王にまつわる伝承が残る五百野を訪れ、はるか古代のロマンを感じてみてはいかがでしょうか。

